

協働の島で 若者たちの元氣を取り戻す

若者自立支援団体 ONE STEP 代表／イターン 笠間 淳



佐久島：三河湾最大の島。面積1.73 km²、周囲11.8km、人口239人(平成29年4月現在)。標高38mを最高点とし、なだらかな地形と温暖な気候、豊かな自然にめぐまれる。ぶらり旅のできる島として、「祭りとアートに出会う島」をキャッチフレーズに島おこしをしている。

若者の活躍の拠点となるカフェを開業

二〇一四年四月、私は初めて佐久島の地を踏みました。その日は私が夢として掲げている若者の自立支援を行うべく、佐久島へ定住させていただくための説明会でした。島の東・西区の両区長さんをはじめ、「島を美しくつくる会」のメンバー、西尾市佐久島振興課の方など総勢十数名の方々に対し、私を含めて三人のメンバーが計画や展望についてのプレゼンを行いました。

いわゆるニートやひきこもりと呼ばれる若者たちが社会現象とまで言われている昨今、私は、学校教育の範疇でカバーしきれない子どもたちや、社会保障のおよばない領域にいる若者たちは、自らの力を持て余し、彼らの力を正し

く見出してあげられる大人を求めていると感じてきました。そんな折、佐久島という人口二五〇人程度の島が高齢化の一途をたどっているという話を聞きました。私は、若者たちの力を必要としている地域に、彼ら若者が行くことで、島にとっては若い力を、彼らにとっては活躍する場と認めてくれる人たちが得られる、相互扶助の関係になるのではないか、と思いました。そこで佐久島振興課に相談の上、島の方々と話をする場を設けていただいたのです。

私自身は、名古屋で生まれ育ったので都市部の便利な環境でしか生活したことがありません。それゆえ、いくら自分の夢の実現のためとは言っても、島での暮らしには不安しかありませんでした。しかし、そんな不安とは裏腹に、島には私たちを温かく出迎えてくださる方々がおられ、右



「Cafe & BAR じょえる」の外観。



島の方々と相談しながら完成させたパスタ。

も左も分らない私たちにさまざまな事を教えていただきました。そんな親切な気持ちに触れているうちに、島に住むということをや、腰掛け程度に考えていた自分が恥ずかしくなり、この地にしっかり根をおろし、島のためになる活動を継続していこう、と決心しました。

現在、私は、佐久島東港から徒歩三分の場所で「Cafe & BAR じょえる」というお店を経営しています。私たちが移住し、島でお店を開くこととなった時に、「島を美し

くつくる会」の鈴木喜代司会長から「今の佐久島では食べられないものをメニューにしてみよう」というアドバイスをいただきました。当時、島内にある民宿以外の飲食店は、カフェが二軒、喫茶店一軒、定食屋が三軒、海の家が三軒、飲み屋が一軒の〇〇軒でした。いろいろと相談に乗っていただき、最終的にはパスタをメインとしたメニューを出すカフェをつくることに決まりました。

カフェ経営とあわせた自立支援

カフェを営む一方で、若者の自立支援も行っております。ニートやひきこもりの方は、さまざまな原因から社会との関係を断ち切っています。彼らの力を正しく評価できる人と、その力を発揮する環境さえ用意できれば、彼らは再び



遊休農地を活用した農業体験の様子。

社会とつながり、活き活きと人生を謳歌することができるようになります。そんな「人」と「環境」が佐久島にはあり、このCafe & BARじよえるは、そんな若者たちが活躍できる場所としても機能しています。実際、お店を若者たちと一緒に運営したり、毎月のように島で自立支援合宿を行っています。

まだ島に来るだけの余裕のない若者に関しては、本土で通所型支援や訪問型支援をしています。まず人間関係を構築し、佐久島の事を伝えながら、自分の力を佐久島で発揮したいという思いのある若者を佐久島に連れていきます。そのため、ひとたび島に来た時の彼らの活躍ぶりは、親御さんも目を見張るほどです。

現在、佐久島振興の次なる一手として農業に取り組んでいます。これをニートやひきこもりであった若者たちとともに行っています。普段は使わない鍬や耕耘機を駆使し、よるけながらも一所懸命に取り組む彼らの姿を見ると、「島への貢献と、活躍の場の創出」という、当初の目的がしっかり達成できているなという手ごたえを感じます。

誠心誠意の対応で住民の理解を

メディアはニート、ひきこもりの方々の悪い部分だけを切り取って、記事として取り上げてしまう傾向があるため、彼らが社会から冷たい目で見られる一因となっています。

ニート、ひきこもりという言葉自体の陰のイメージも強く、私たちが移住した当時は、多くの島の方々からは厳しいお言葉をいただきました。「なんでそんなことをわざわざ佐久島でやるんだ」「他の島でやれ」「問題を起こしたらどうする気だ」と……。

当初、私たちはここに来てはいけなかったのではないかとすごく悩みました。しかし、そういった言葉一つひとつに対してしっかりと、誠実に対応をし続けた結果、今では島でボランティアが必要な活動などがあると、「笠間君、若い子たちは今度来れるかい？」といった声をかけてくれるまでになっています。

島に住んでいる方々にとって、若者が移住することは、島を荒らされるのではないか、いい文化が壊されるのではないか、何か問題を起こすのではないかといった、不安につながるようです。そんな住民の方々に対し、誠心誠意対応し、私たちの活動をしっかりと見て、知ってもらうことが大切なのではないかと考えています。

島で元氣を取り戻す若者たち

佐久島にはコンビニやスーパーはありません。あるのは農協と小さな個人商店のみです。不意に何かが必要になっても買いには行けません。本土で夜の予定がある場合、定期船で島に戻ることができなくなります。はっきり言って

不便なところがたくさんあります。しかし、実際に住んでみると、思っていた以上に不便さを感じることはありません。モノに溢れている現代社会にあつて、いかに無駄なものが多いかを島暮らしは教えてくれます。

そんな島だからこそ、都会で疲れた若者たちがやって来るのだと思います。それは一般の観光客も私が面倒をみて



農業の休憩時間に晴れ晴れとした表情で食事をする若者たち。

いるニートやひきこもり、不登校の子どもたちも同じかもしれない。島に来て活動をする彼らは、曇っていた顔が晴れ晴れとしていきます。

LDという発達障害をもち、文字の読めない中学一年生の不登校の男の子が島に来たことがあります。彼は、懸命に文字を練習して、最終日にお母さんへありがとうの気持ちを込めた手紙を書きました。また、八年間ひきこもって部屋から出ることがなかった若者は、佐久島に来て三カ月で働きはじめました。一九年間ひきこもっている若者は、今まさに佐久島で変わろうとがんばっています。彼らの様子を見てみると、佐久島に来て本当によかったと心から思います。

佐久島発ひきこもり支援モデルの構築へ

私の最終目標は、佐久島でひきこもり支援をすることだけではありません。ひきこもり支援は収益性とは関係なく社会から必要とされる仕事で、絶対に今の日本には必要なことだと思っています。そこで、収益性が低いと手をこまねいているのではなく、しっかりと収益が見込めるビジネスモデルを構築し、他の地域に普及させていくことで、ひきこもり支援という社会事業に取り組んでいく同志を増やしていきたいと考えています。これが、社会の仕組みから外れてしまった若者たちを、一人でも多く救うことができ



カフェにて筆者（左）。

る一つの方法だと思っています。

もし、他地域でも転用可能な「過疎化が進む離島でひきこもり支援」というモデル（現在、構築中）をつくることできたなら、いまの飲食事業とひきこもり支援にそうした制度（モデル）事業を加えて、ゆくゆくはそれら三つを組

島からのメッセージ

◎一緒に汗を流すことで得た住民の理解

「島を美しくつくる会」は、昨年度で20年が経過しました。当会では「ひと里」「美食」「漁師」「いにしえ」の4つの分科会と「定住促進」により、それぞれの分科会が島の活性化に取り組んでいます。その活動の多くは、島外から参加するボランティアの協力を得て実施しており、ともに楽しみながら活動することで島全体を元気にしています。

当会の取り組みも、平成13年度からは「アートと地域の協働」という展開に入り、これらの取り組みがマスコミに取り上げられることが多くなり、いまでは若者を中心とした観光客が増加しています。発足当時約5万人であった年間観光客数は、同27年度には10万人を突破、28年度も10万6,000人の観光客が訪れています。現在の佐久島は人口239人（平成29年4月1日住民基本台帳）。そんな島に10万人の観光客が訪れており、交流人口の増加という目に見える成果として表れています。しかしながら、高齢化率が50%を越える佐久島では、毎年人口は減少しており、島を存続するための定住対策は早急に取り組んでいかなければならない課題となっています。

交流人口の増加を図りながら、その中から島への定住を図る当会の取り組みにより、島を訪れた若者たちの中から定住した方がいます。笠間さんをはじめ定住した若者は、それぞれ個性的なカフェを開業し、その店を目当てに島を訪れる観光客も多く見られます。

笠間さんたちが定住した当初は、これまで島になかった考え方や発想から、島の住民にはなかなか受け入れられませんでした。しかし、当会の活動で一緒に汗を流し作業する中で、交流し話す機会が増えたことで、少しずつ理解されるようになり、現在では、当会の役員になって島おこしに協力をしていただいております。

これからも、島の特長を活かしながら、住民と定住者が協力し、若者が定住できるよう島側の受け入れ環境を整備して、新しい島づくりを目指してまいります。

（島を美しくつくる会 会長 鈴木喜代司）

み合わせた事業を展開していく予定でいます。私たちと同世代の若者を佐久島に呼びこみ、定住を促進していくためには、やはり産業が必要だと考えます。その意味で、現在、私たちが行っている「遊休農地の再開発」に

よる農業は、すぐ可能性に溢れた取り組みだと思っています。ニートやひきこもりの若者、不登校の子どもたちと一緒に、少しでも佐久島の振興に役立てるよう今後もお手伝いをさせていただく所存です。

笠間 淳（かさま じゅん）

1989年生まれ。大学在学中にベンチャー企業の経営者の元でカバン持ちを経験。社会起業家になるべく大学在学中に起業。大学卒業後は大手予備校に就職し、3年半コーチングやティーチングを学ぶ。その後仲間とともに西尾市佐久島に「Cafe & BARじよえる」を開業し若者支援を行う。